

## 第6号の編集を終えて

紀要の交換相手から、ときおり催促をうけることがある。たいていは西ドイツからである。こちらは3年に1度の刊行であるのに、あちらからは1年に何冊もとどくことがあるので無理もない。これも文化的片貿易の一例で、片身のせまいことではある。

来年の8月下旬から9月上旬にかけて、4年に1度の第24回国際地理学会議(I G C)が、初めてわが国で開催される。それに向けて本号には二つの欧文論説をのせた。山口助教授は、国際地理学連合(I G U)の研究委員会の一つ「国家の集落システム」のメンバーとして、その仕事の一部をまとめた。田辺助教授も、それと関係のある日本の都市システムについて問題にした。拙稿は、講義メモに基づいて、やはりI G Cに向けて、日本における地理思想の一端を外国人に紹介するためにまとめたものである。

三上岳彦助手は、1978年4月に就任。広島大学総合科学部講師に昇任した米田巖氏の後任である。専門は気候学で、1977年3月には、「北半球における気候変動の地域差に関する動気候学的研究」で東京大学から理学博士の学位を授与された。いうまでもなく、気候は人生や文明と深いか、わりがある。本号に都市気候に関する論文を加えることができたのは、同慶の至りである。

本学部における人文地理学のスタッフは上記の4人のみ、講座も一つだけである。これでもって、千人近い受講者のある一般教育科目の人文地理学から、教養学科の専門課程、それに大学院地理学専門課程と、実に9ヵ年にわたる本学の全コースを担当している。一昨年来、従前の教養学科は大幅に拡充されて、教養学科第一(総合文化)、同第二(地域文化)、同第三(相関社会科学)へと改組された。当人文地理学分科は、文化人類学、科学史・科学哲学とともに同学科第一に属することになった。この輝かしい再編成にあたり、人文地理学分科には格別の変化はなかった。今後の発展を期し、一同決意を新たにして再出発するほかはない。一講座の小さな教室ではあるが、分科の学生が10数名、大学院の人文地理専攻学生も10数人、それに毎年のように客員の先生や研究生方も加わり、活気を呈している。こうしたわれわれの研究・教育関係の事務をはじめ、万般にわたって世話される女子職員も、大忙しの毎日である。一昨年末いらい、前任者の外池佳代子(旧姓島村)さんに代った田中のり子さんが、明るく、てきぱきと働いている。

この3年間を振り返ってみると、教官たちは海外へ出張する機会が多かった。田辺助教授は、1977年9月西ドイツへ、I G U応用地理学作業部会のメンバーとして、同シンポジウムに出席して研究報告、翌年1月から7月にかけては、パリ大学客員教授、9~10月にはフランスへ、第2回日仏地理学会議のシンポジウム「都市と港湾」の報告者と座長をつとめた。山口助教授は、1977年1月西ドイツへ、I G Uの研究委員会に出席、1978年9月から本年4月までは、A.C.L.S.のファンドで、シカゴ大学の都市研究センターにおいて在研中である。西川は、1976年8月下旬から9月上旬にかけて、モスクワにおける第14回I G U総会、第23回I G U学術大会に日本学術会議から副代表として派遣された。1978年8月には、環境情報科学センター主催の研修旅行に参加、ナイロビにある国連人間環境会議事務局、パリのO E C D環境部、英・仏の環境省などを訪問した。これもみな、国際的連携が大切な地理学研究にとっては、やむをえないことであるが、各教官は、本学部のみならず全学的委員会のメンバーとしても、それ相当の活動をつづけているつもりである。

折にふれて卒業生の活躍を知る。喜ばしいことである。時に悲報胸を裂く。玉置和夫君(1975年卒、享年30才)奄美に死す。有為の植物民俗学者を失う。痛恨のきわみ。ひたすら冥福を祈る。終りに、本紀要をはじめ別の機会に発表した論文や報告などには、文部省の科学研究費補助金に負うところが大きい。ここに記して深く謝意を表したい。また、本紀要の刊行について、学部の関係各位に厚く御礼申し上げる次第である。

1979年新春

西川 治